

シーズンワクチン株であるA/New Caledonia/20/99類似株から抗原変異したA/Solomon Islands/3/2006類似株に移行し、これがシーズン後半に主流を占めた。AH3亜型は2006/07シーズンワクチン株であるA/Hiroshima(広島)/52/2005類似株から抗原変異した株がシーズン初めより分離され、この株がシーズン後半に大半を占めた。B型は2005/06シーズンに引き続きほとんどがVictoria系統で、2006/07シーズンワクチン株であるB/Malaysia/2506/2004に類似していた(本号3ページ)。

2007/08シーズンのために選定されたワクチン株は、AH1亜型は前シーズンと異なるA/Solomon Islands/3/2006となり、AH3亜型およびB型は前シーズン同様、それぞれA/広島/52/2005、Victoria系統に属するB/Malaysia/2506/2004である(本号10ページ)。

インフルエンザワクチン生産量と高齢者の接種率: 2006/07シーズンは2,518万本が製造され、1,877万本が使用された。2007/08シーズンには約1,940~2,080万本の需要が見込まれており、最大で2,350万本の製造が予定されている。予防接種法に基づく高齢者(主として65歳以上)に対する接種率は、2006/07シーズンも含め最近4シーズンは50%前後にとどまっている(<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/06/s0628-20.html>)。

新型インフルエンザ対策: WHOによる現在のパンデミックインフルエンザ警報はフェーズ3となっている。海外ではヒトのA/H5N1亜型感染例が引き続き発生しており、WHOには2007年11月5日までに334例(死亡205例)が報告されている([http://www.who.int/csr/disease/avian\\_influenza/country/en/](http://www.who.int/csr/disease/avian_influenza/country/en/))。

日本では2007年3月26日に「新型インフルエンザ対策ガイドライン(フェーズ4以降)」が策定された(<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekaku-kansenshou04/index.html>)。国と都道府県はそれぞれ1,050万人分ずつ計2,100万人分の抗インフルエンザウイルス薬の備蓄を開始した。また、A/H5N1プレパンデミックワクチンは2006年度に1,000万人分が備蓄され、2007年度にさらに1,000万人分が備蓄される予定である。地研の検査設備の整備も急務であり、各自治体での早急な予算措置が望まれる。

おわりに: 従来日本では流行がないと考えられていた夏季に3シーズン連続して地域流行がみられた。海外渡航後にインフルエンザを発症した者からの検出も年間を通して報告されている。インフルエンザウイルスサーベイランスでは、夏季も含めて通年的に確実にウイルスを分離して、ワクチン候補株を確保するとともに、流行株のウイルス解析情報に基づきワクチン株を選定することが益々重要となっている。

2007/08シーズン速報(<http://idsc.nih.gov/iasr/prompt/graph-kj.html>): 2007年11月6日現在、愛知(14ページ)でAH3亜型、神奈川、沖縄(14ページ)、千葉(14-15ページ)、兵庫、滋賀、大阪、北海道、東京でAH1亜型が分離されている。



[今月の表紙へ戻る](#)

[IASRのホームページに戻る](#)

[Return to the IASR HomePage\(English\)](#)

**IASR** *Infectious Agents Surveillance Report*

◀ HOME IDSC

ホームへ戻る